

## 避難先の福島市で続けた報恩講



大震災の翌年からこれまで、常福寺は福島県事務所を会場に報恩講を営み、福島市などに避難する門徒とつながり続けてきた。昨年11月18日には9回目の報恩講を営み、5人が参拝した。

正信偈をつとめ、法話を聴聞。そして、参拝者と廣畑住職で茶話会を開いた（写真）。

同寺仏教婦人会役員の遠藤トシ子さん（86）は被災後、福島市の仮設住宅で一

人暮らしをしていたが、現在は同市のマンションで娘家族と一緒に暮らす。遠藤さんは「この10年間はいろんなことがありますて、あっという間。たくさんの門徒仲間や友人が亡くなった。生活の場所が変わっても、お寺とのつながりがあったからこそ、前向きに過ごしてこられた。家族や住職、門徒や仏婦の仲間が近くにいなくてさったおかげ。ただ、福島市の仮設住宅で暮らしていた門徒仲間も、ほとんどがいわき市に引っ越してしまい、ここ（福島県事務所）に集まる人も少なくなった」と話す。仏婦会長の鈴木光子さん（74）は「浪江町の土地は数年前に売却してしまい、戻りたくてももう戻れない」と語りつつ、「コロナの影響で、おおよそ半年ぶりに集まることができたのでうれしい。話したいことがいっぱいある」と笑顔を見せていた。